大学生における機能不全的ユーモア表出に関する研究

0807032
松浦　聡美

【目的】

ユーモアは私たちに広く受け入れられており，実際にユーモアには効用があるとする実証研究も進んでいる。しかし，日常的な場面ではユーモア表出が必ずしも相手のユーモア感知を引き起こすわけではなく，ユーモアは適切に用いられることが必要である。上野（1992）はユーモアを「遊戯的ユーモア」・「攻撃的ユーモア」・「支援的ユーモア」の３つに分類し，この中でもっともストレス緩和効果があるのは支援的ユーモアだと指摘した。しかし，長谷川（2011）の研究では，どのようなユーモア志向性も機能不全的ユーモア表出になる可能性が示され，機能不全的ユーモア表出を引き起こさないユーモア志向性というものがないことがわかった。これまではユーモアの効用など，プラス面に焦点を当てた研究が盛んであったため，今後はユーモアのマイナス面に関する研究も発展させていく必要がある。

本研究ではユーモア志向性ではなく，ユーモア表出の傾向と機能不全的ユーモア表出の関連を検討する。また，どのようなユーモア表出も機能不全的ユーモア表出になり得ることが示唆された場合，ユーモア表出の動機による分類がどの程度機能不全的ユーモア表出を説明しているのかを明らかにする。

【方法】

被験者は大学生 124 名(男性 32 名,女性 92 名)であり，平均年齢 20.07 歳(SD=1.29)であった。また，調査期間は 2011 年 10 月から同年 11 月であった。調査は授業中に質問紙を配布し、その場で回収する形をとった。質問紙の内容は，塚脇ら（2009）が作成したユーモア表出尺度に一部修正を加えたものと，長谷川（2011）が作成した機能不全的ユーモア表出尺度を用いて，どちらも５件法で回答を求めた。分析には SPSS14.0J for Windows と Microsoft Excel 2007 を用いた。

【結果と考察】

ユーモア表出尺度について最尤法・プロマックス回転で因子分析を行った結果,「自虐的ユーモア表出因子」,「攻撃的ユーモア表出因子」,「遊戯的ユーモア表出因子」が抽出された。また，機能不全的ユーモア表出尺度について主因子法・プロマックス回転で因子分析を行った結果,「状況判断不足因子」,「表出者本位因子」,「傷つけ因子」,「内輪受け因子」が抽出された。

機能不全的ユーモア表出尺度全体・各因子とユーモア表出尺度の各因子との間の相関を見るためにピアソンの積率相関係数を算出すると，全てのユーモア表出因子と機能不全的ユーモア表出尺度全体との間に正の相関が見られた。また，全てのユーモア表出因子は機能不全的ユーモア表出尺度の複数因子と正の相関を示していた。

さらに，第１変量群をユーモア表出，第２変量群を機能不全的ユーモア表出として正準相関分析を行った。その結果，第１変量群の第１正準変量は「友好的ユーモア表出」が，第２変量群の第１正準変量は「傷つけ」であることがわかった。また，第１変量群の第２正準変量は「攻撃的ユーモア表出」で第２変量群の第２正準変量は「表出者本位」であった。加えて，第１変量群の第１正準変量である「友好的ユーモア表出」は，機能不全的ユーモア表出を 30%程度説明しており，第１変量群の第２正準変量である「攻撃的ユーモア表出」は，機能不全的ユーモア表出を５%程度説明していることが明らかになった。

以上のことから,機能不全的ユーモア表出は,ユーモア表出の動機による分類のみでは充分に説明できないことがわかった。今後の研究には,機能不全的ユーモア表出を説明する要因を，ユーモア表出を行う状況やユーモア表出量など，ユーモア表出の動機による分類以外から検討することが期待される。

（指導教員 豊村　和真　教授）